

鬼怒川洪水時の浸水・避難状況に関する ヒアリング調査結果 【単集計結果】

平成28年 1 月19日
水害時の避難・応急対策検討ワーキンググループ（第3回）

中央大学理工学部 河川・水文研究室

鬼怒川洪水時の浸水・避難状況に関するヒアリング調査結果

【単純集計結果】

1 調査対象

常総市における浸水地域または避難勧告等が発令された地区の住民

2 調査期間

平成 27 年 11 月 21 日（土）から平成 27 年 11 月 23 日（月）

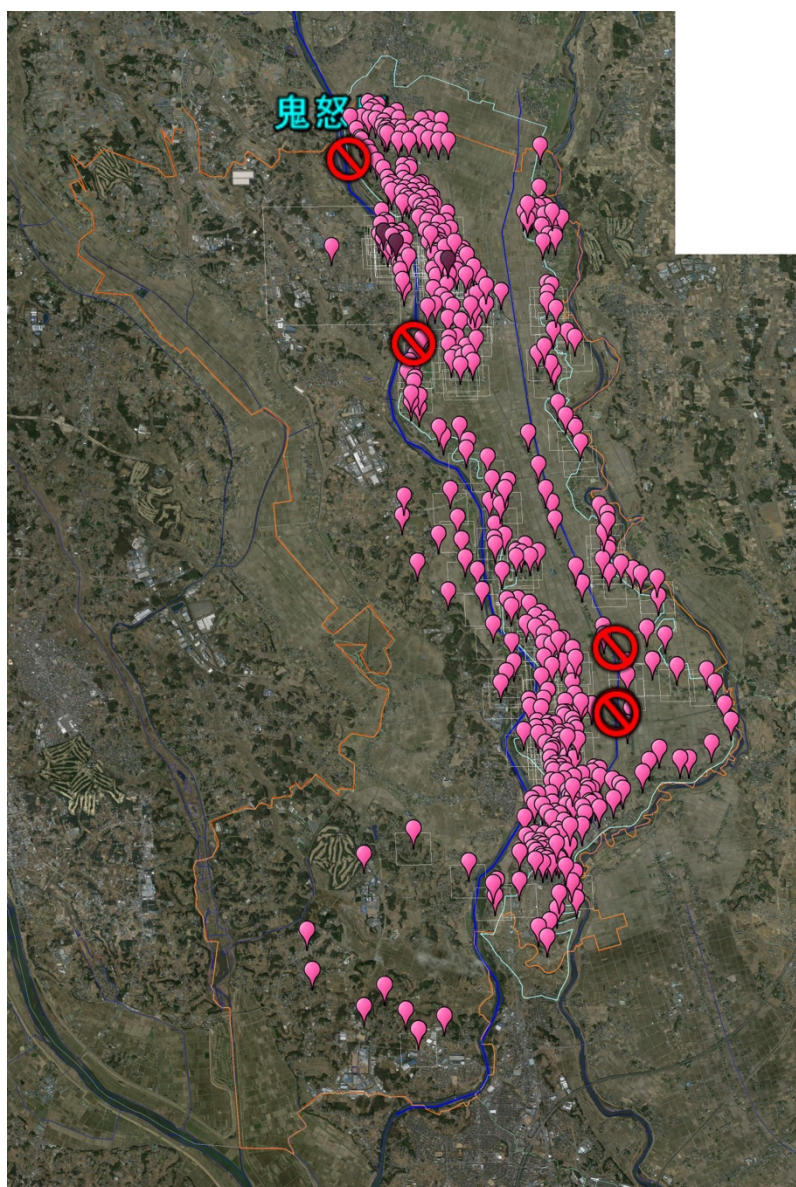
3 取得数

516 件（内、留守宅からの回収数 4 件）

4 調査方法

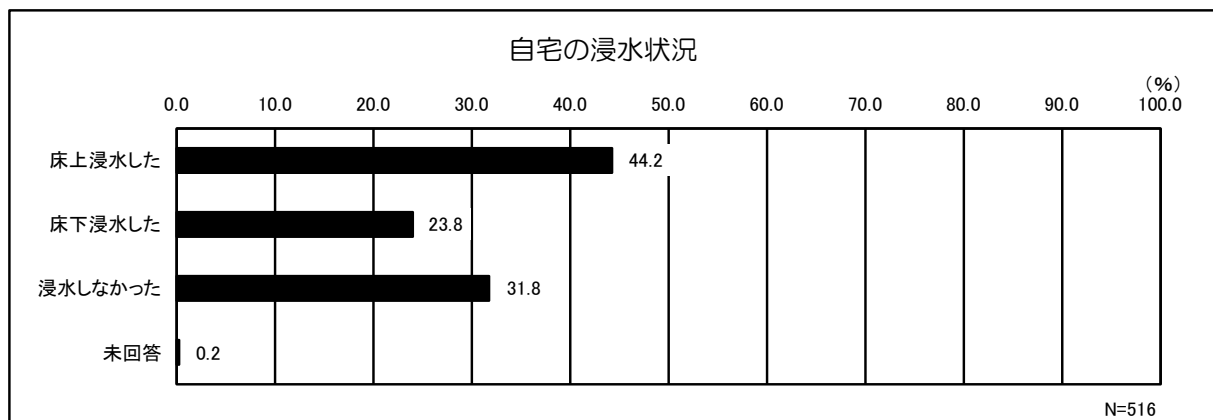
自宅訪問によるヒアリング調査（留守宅はアンケート調査）

5 調査対象世帯分布図



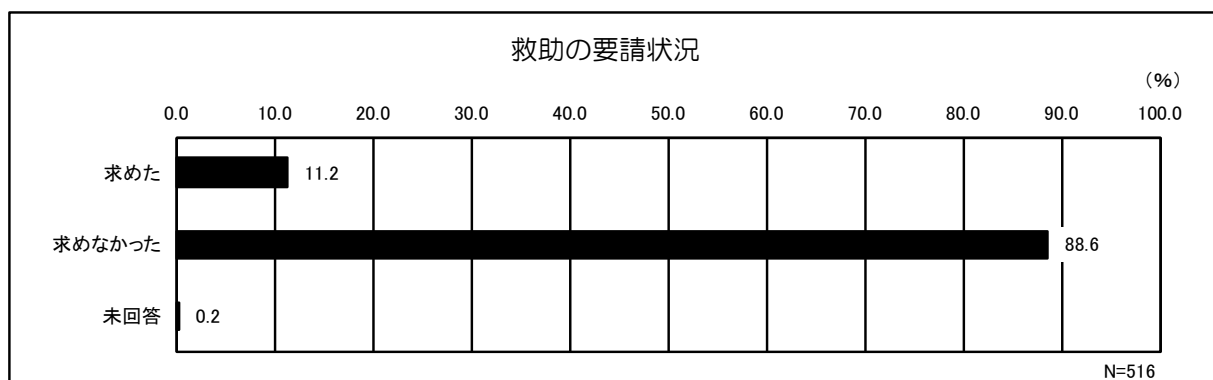
6 調査結果

問1) ご自宅は浸水しましたか。



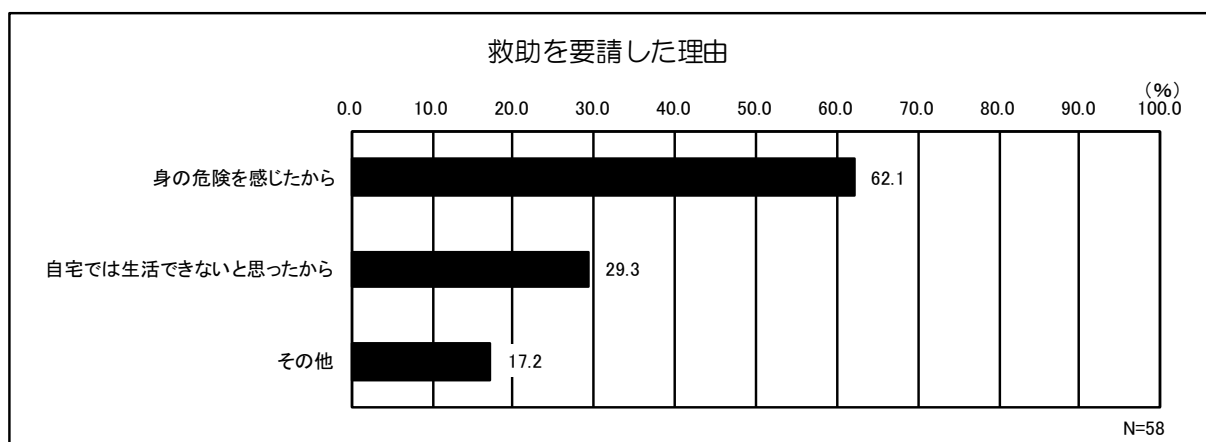
自宅の浸水状況については、「床上浸水した」住民が約 44%、「床下浸水した」住民が約 24%であった。これらの結果から、「自宅が浸水した」住民の占める割合は約 68%となり（「床上浸水」と「床下浸水」の合計）、全体の約 7 割を占めていた。

問2) 救助を求めましたか？



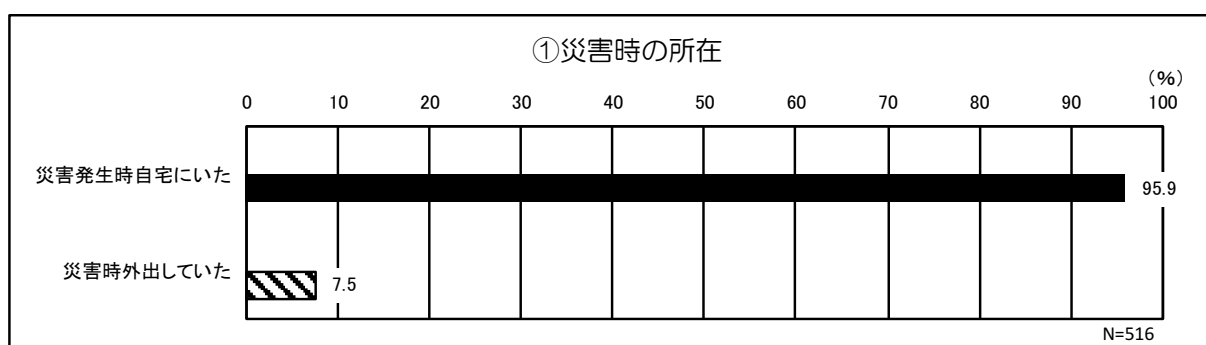
「救助を求めた」住民は約 11%、「求めなかった」住民は約 89%であった。

問3) 救助を求めた方にお聞きします。なぜ救助を求めましたか？(複数回答可)

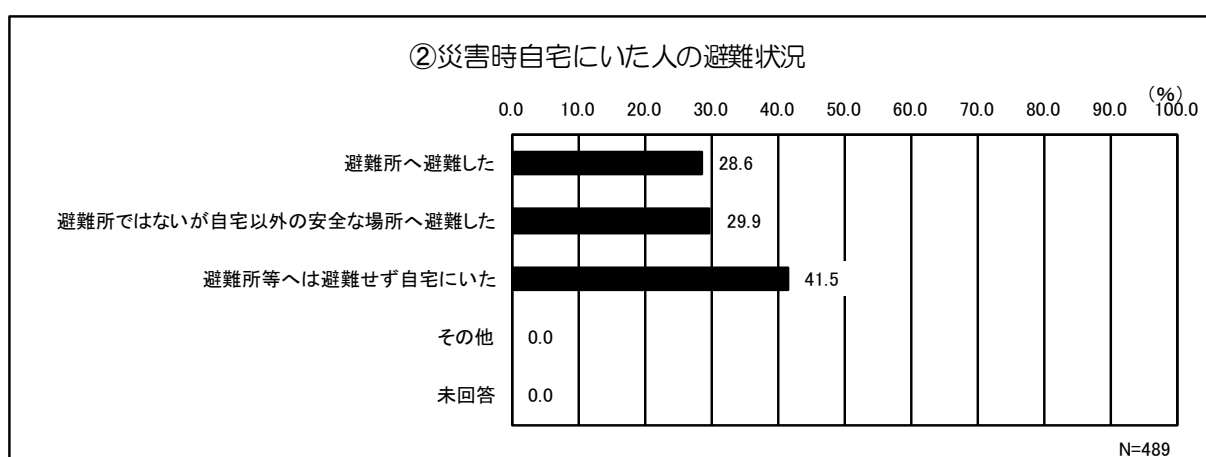


救助を要請した理由として、「身の危険を感じたから」が約 62%、「自宅では生活できないと思ったから」が約 29%であった。「その他 (17.2%)」と回答した人の内容は、「救助のヘリやボートが来たから」が 7 人で、最も多かった。

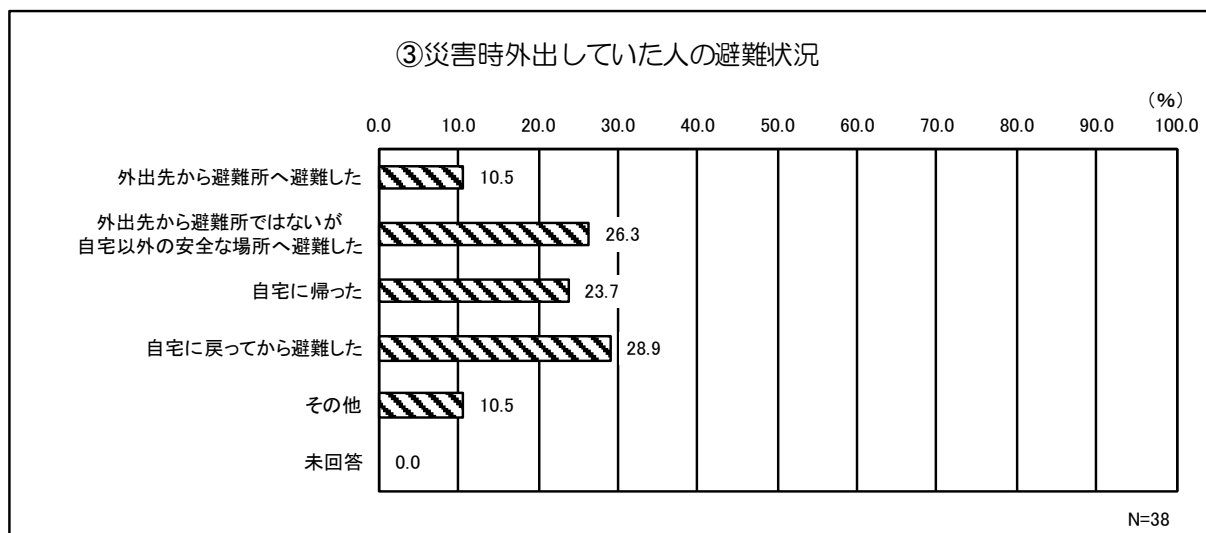
問4) 避難しましたか？



災害発生時、「自宅にいた」住民が約 96%であった。

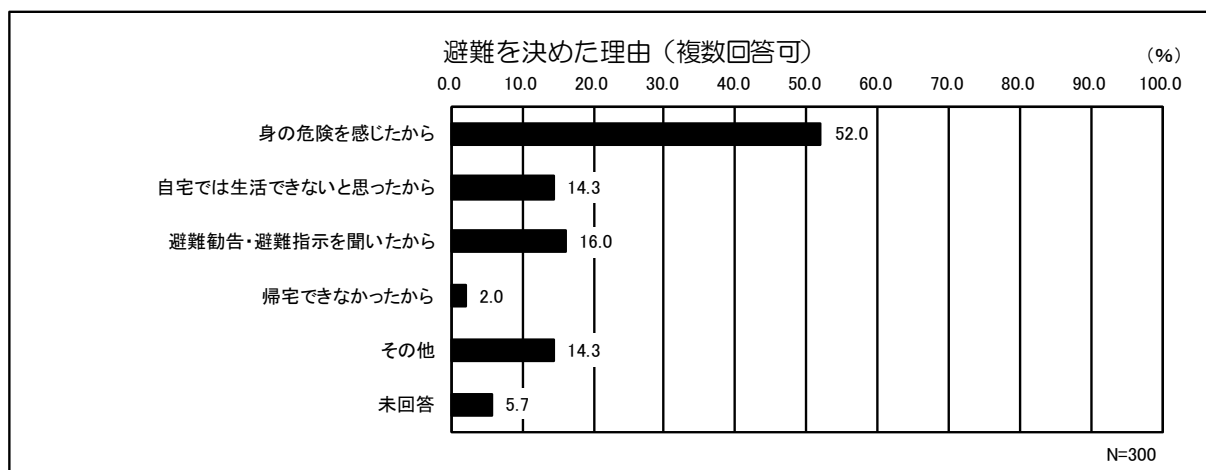


「災害時自宅にいた」住民の避難状況については、「避難所等へは避難せず自宅にいた」が約 42%で最も多く、次いで、「避難所ではないが自宅以外の安全な場所へ避難した」が約 30%、「避難所へ避難した」が約 29%であった。これらの結果から、「災害時自宅にいた」住民のうち約 60%の人が自宅以外の場所へ避難したことがわかった。



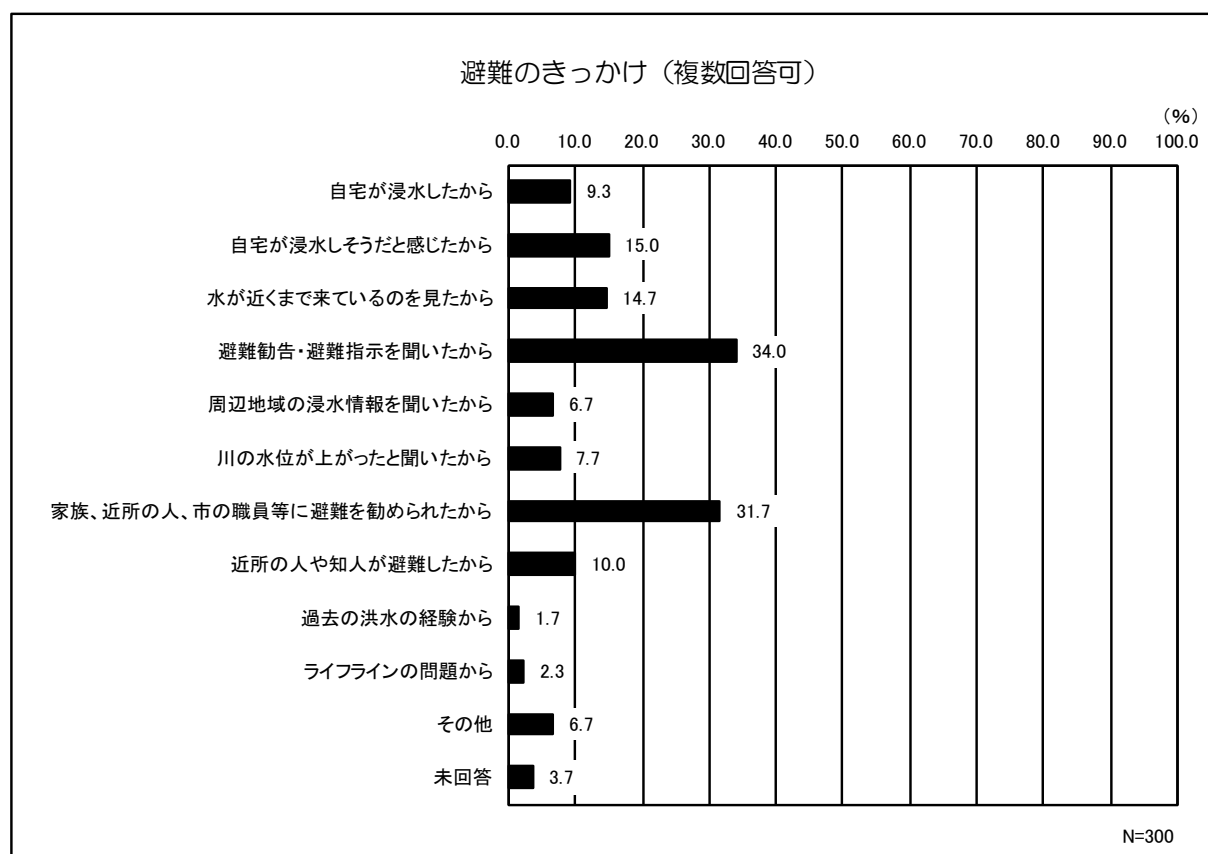
「災害時外出していた」住民の避難状況については、「自宅に戻ってから避難した」が約 29%、「外出先から避難所ではないが自宅以外の安全な場所へ避難した」が約 26%、自宅に帰った」が約 24%で、3つの回答がほぼ同じ割合だった。

問5) 避難した方にお聞きします。なぜ避難を決めましたか？（複数回答可）



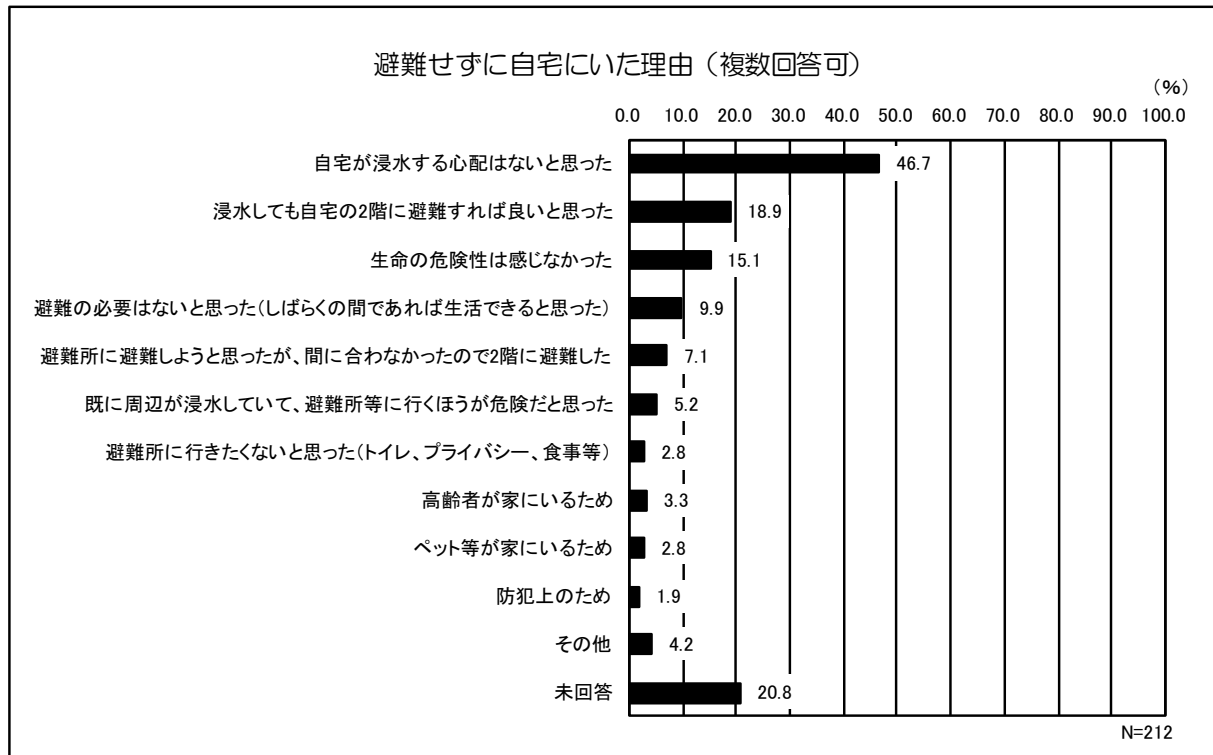
避難を決めた理由については、「身の危険を感じた」が約 52%と最も多く、次いで「避難勧告等を聞いたから」が約 16%、「自宅では生活できないと思ったから」及び「その他」が約 14%であった。

問6) 避難したきっかけは何でしたか？（複数回答可）



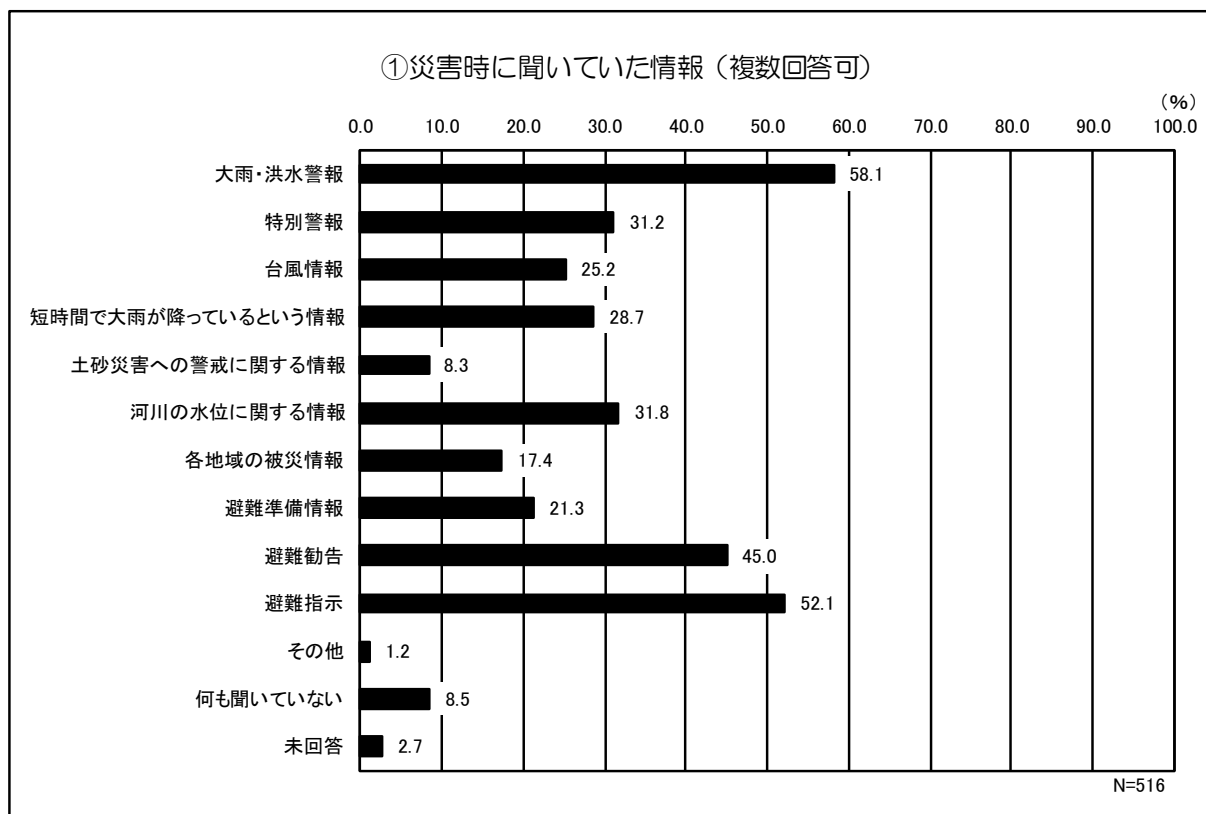
避難したきっかけについては、「避難勧告・避難指示を聞いたから」が約34%で最も多く、次いで、「家族、近所の人、市の職員等に避難を勧められたから」が約32%であった。これらの結果から、避難のきっかけとなったのは自発的な判断よりも他者からの勧めや誘導によって避難した人が多いことがわかる。

問 7) 避難所等へは避難せず自宅にいた方にお聞きします。そのまま自宅にいた理由は何ですか？（複数回答可）

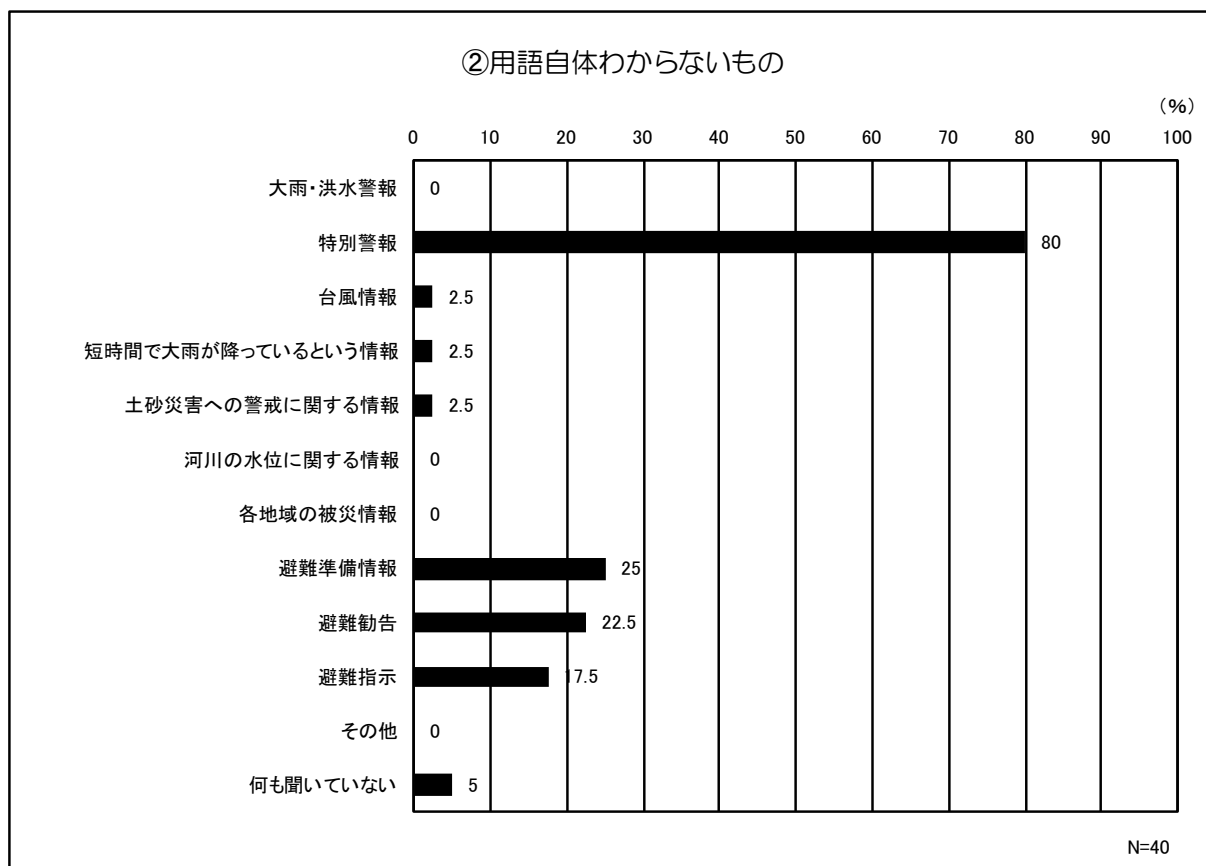


避難せずに自宅にいた理由については、「自宅が浸水する心配はないと思った」が約 47%で最も多く、次いで「浸水しても2階に避難すれば良いと思った」が約 19%、「生命の危険性は感じなかった」が約 15%という結果であった。

問8) 今回の災害時に聞いていた情報をすべて教えてください。(複数回答可、用語自体がわからないものは×)

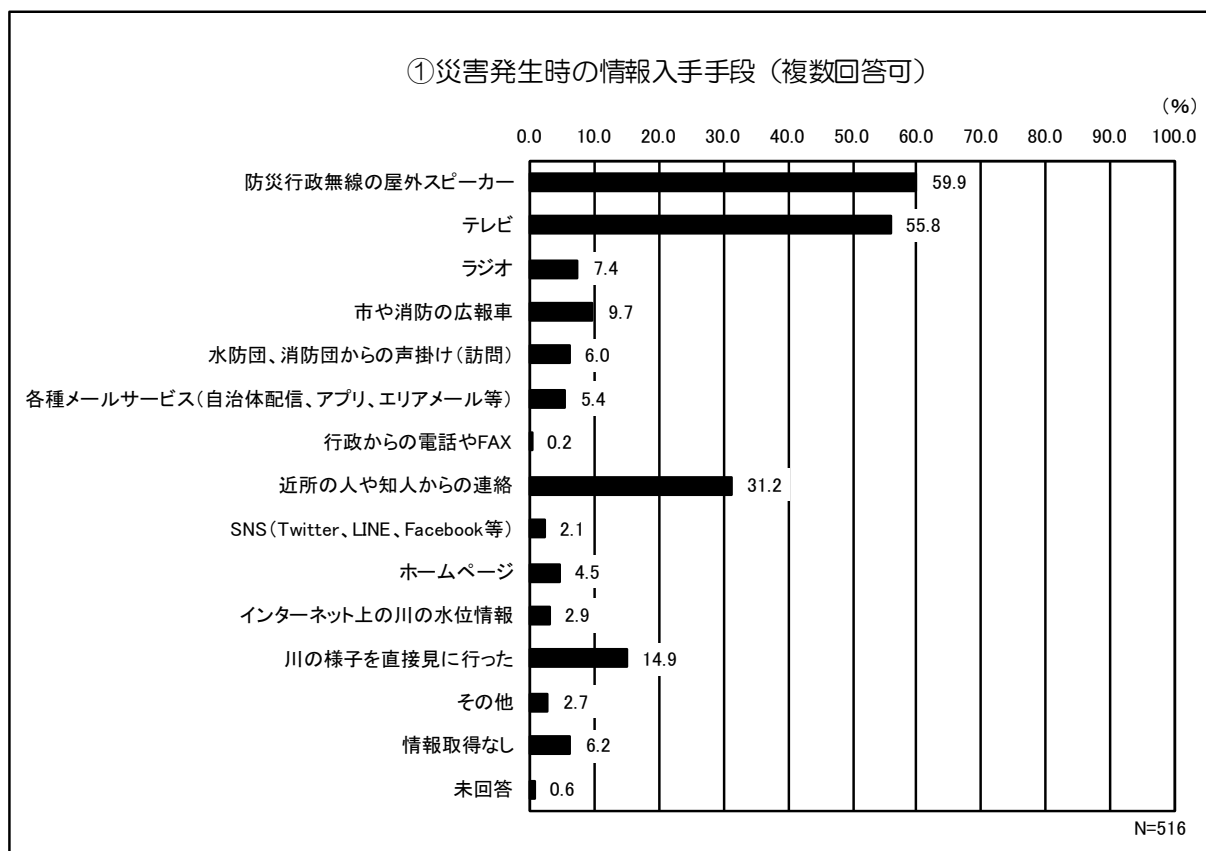


聞いていた災害情報については、「大雨・洪水警報」が約 58%と最も多く、次いで、「避難指示」が約 52%、「避難勧告」が約 45%であった。

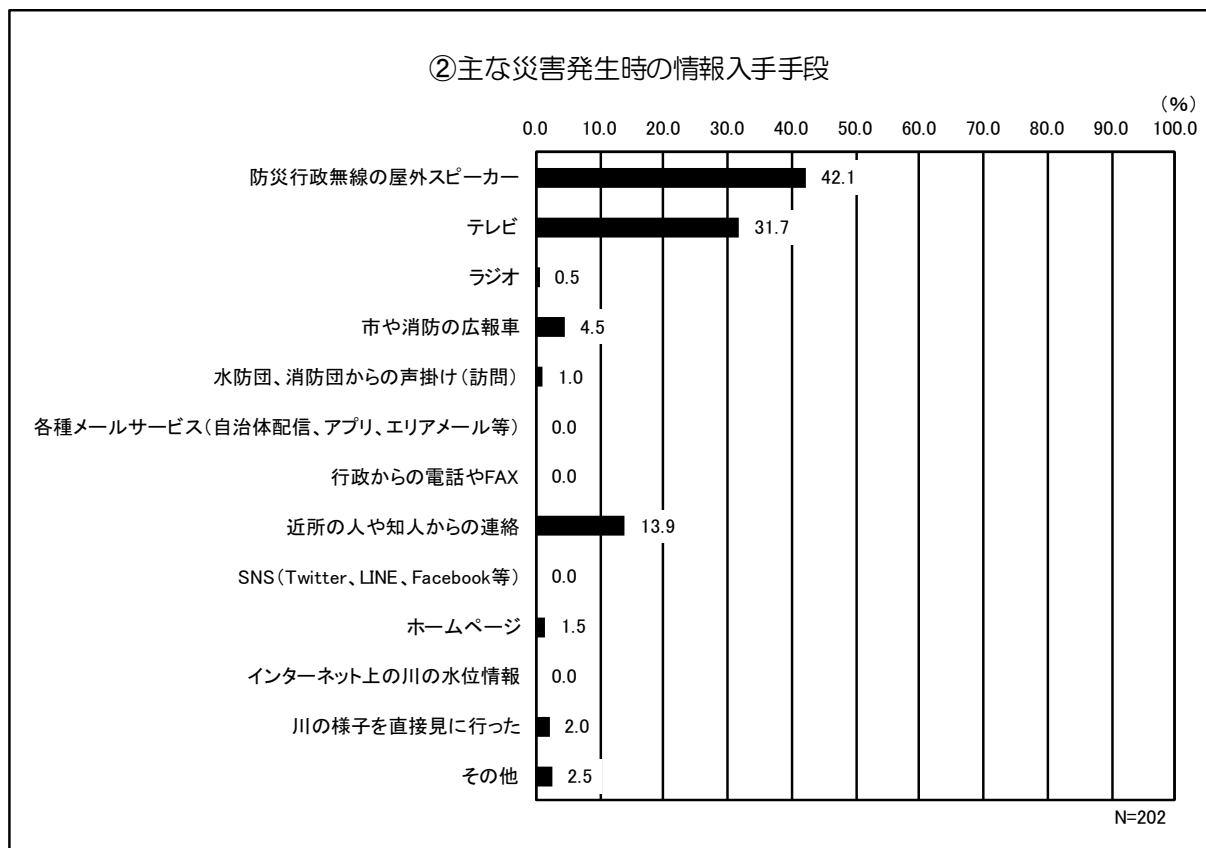


用語自体がわからないものについては、「特別警報」が約 80%と突出して多かった。次いで「避難準備情報」が約 25%、「避難勧告」が約 23%であった。

問9) 今回の災害発生時の情報は何かから得ていましたか？(複数回答可、そのうち主なものに◎)

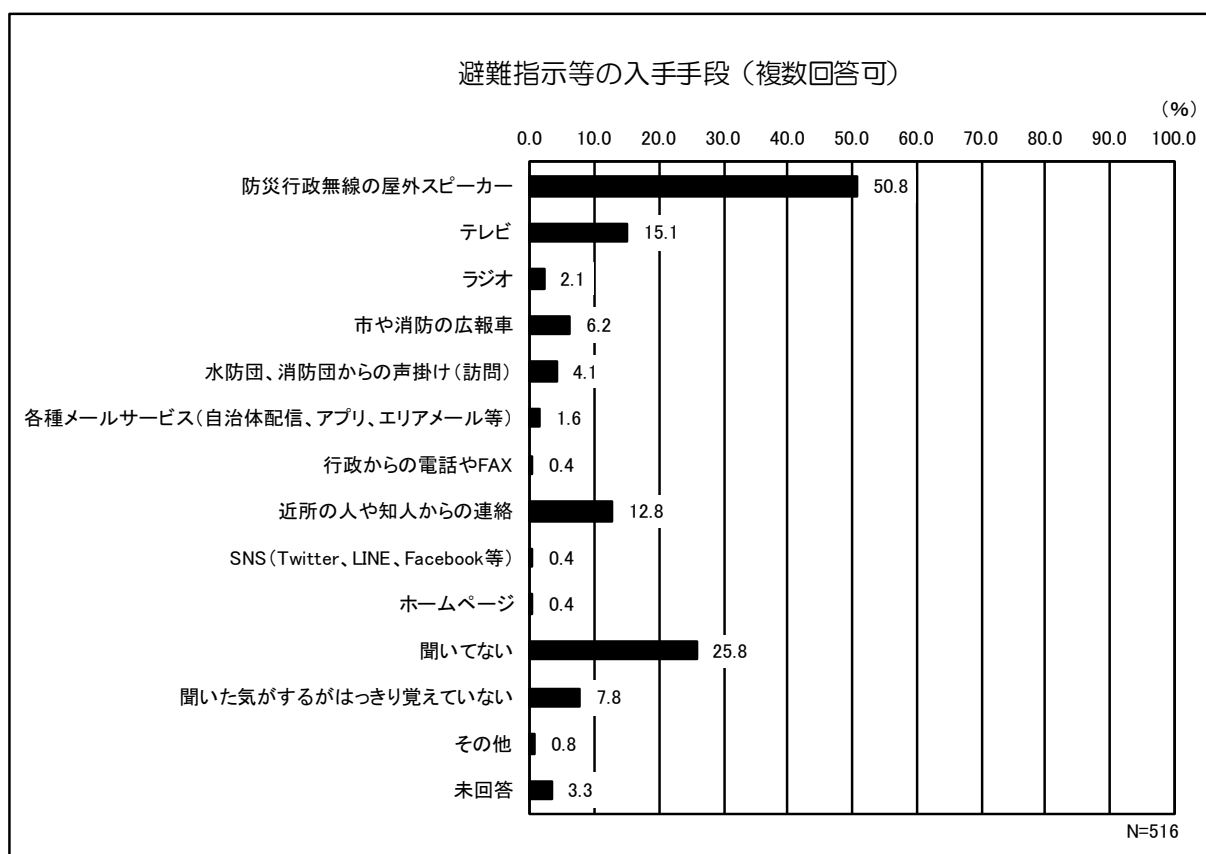


災害発生時の情報入手手段については、「防災行政無線の屋外スピーカー」が約60%と最も多く、次いで、「テレビ」が約56%、「近所の人や知人からの連絡」が約31%であった。インターネットや各種メールサービスなど、パソコン等を活用して情報を入手していた人は、それぞれ5%以下であった。



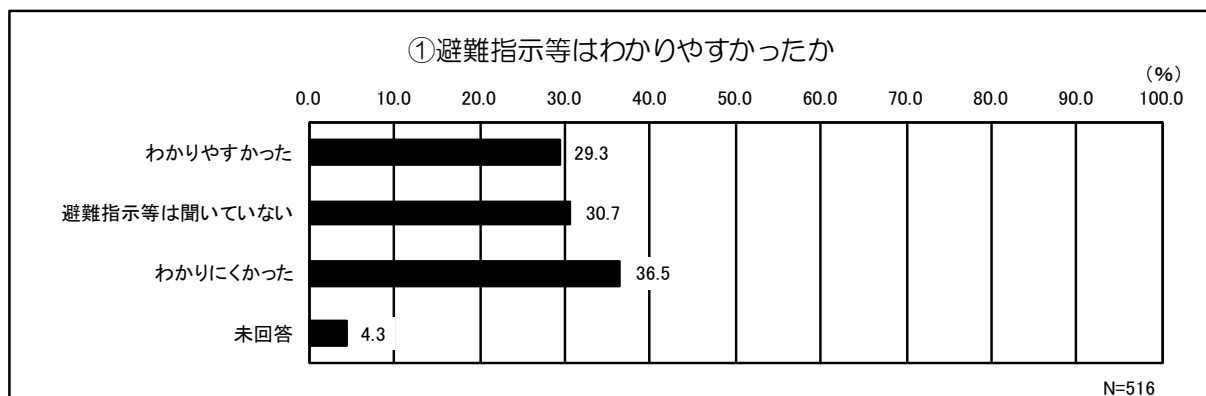
主な災害発生時の情報入手手段としては、「防災行政無線の屋外スピーカー」が最も多く約 42% で、次いで、「テレビ」が約 31%、「近所の人や知人からの連絡」が約 14%であった。

問 10) 避難指示等の情報をいつ何で知りましたか？（複数回答可）

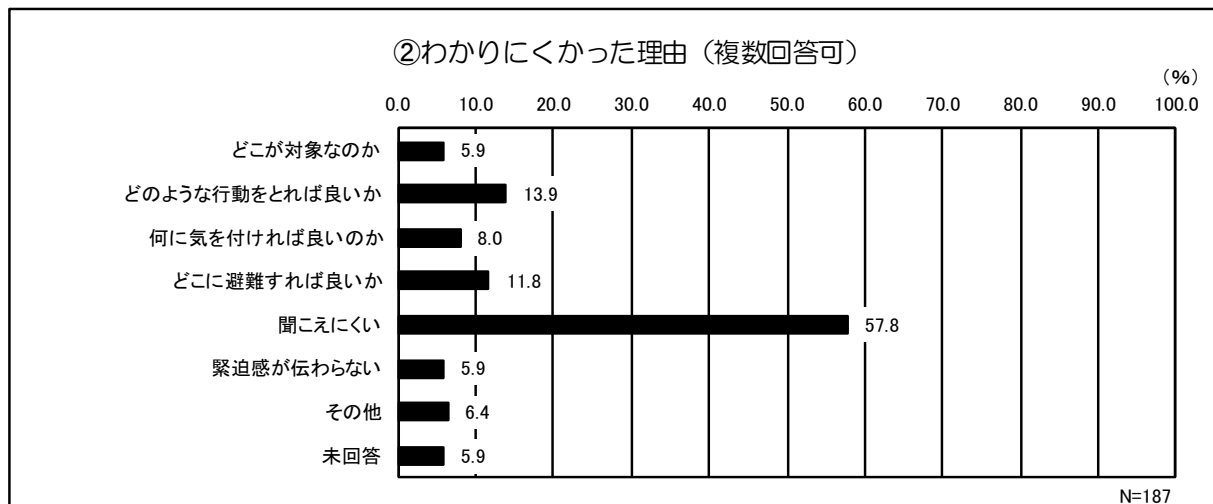


避難指示等の入手手段は、「防災無線の屋外スピーカー」が約 51%と最も多く、次いで、「テレビ」が約 15%、「近所の人や知人からの連絡」が約 13%であり、問 9 の回答と同じ順であった。ただし、「聞いていない」という回答も多く、約 26%あった。

問 11) 避難準備情報、避難勧告、避難指示はわかりやすかったですか？

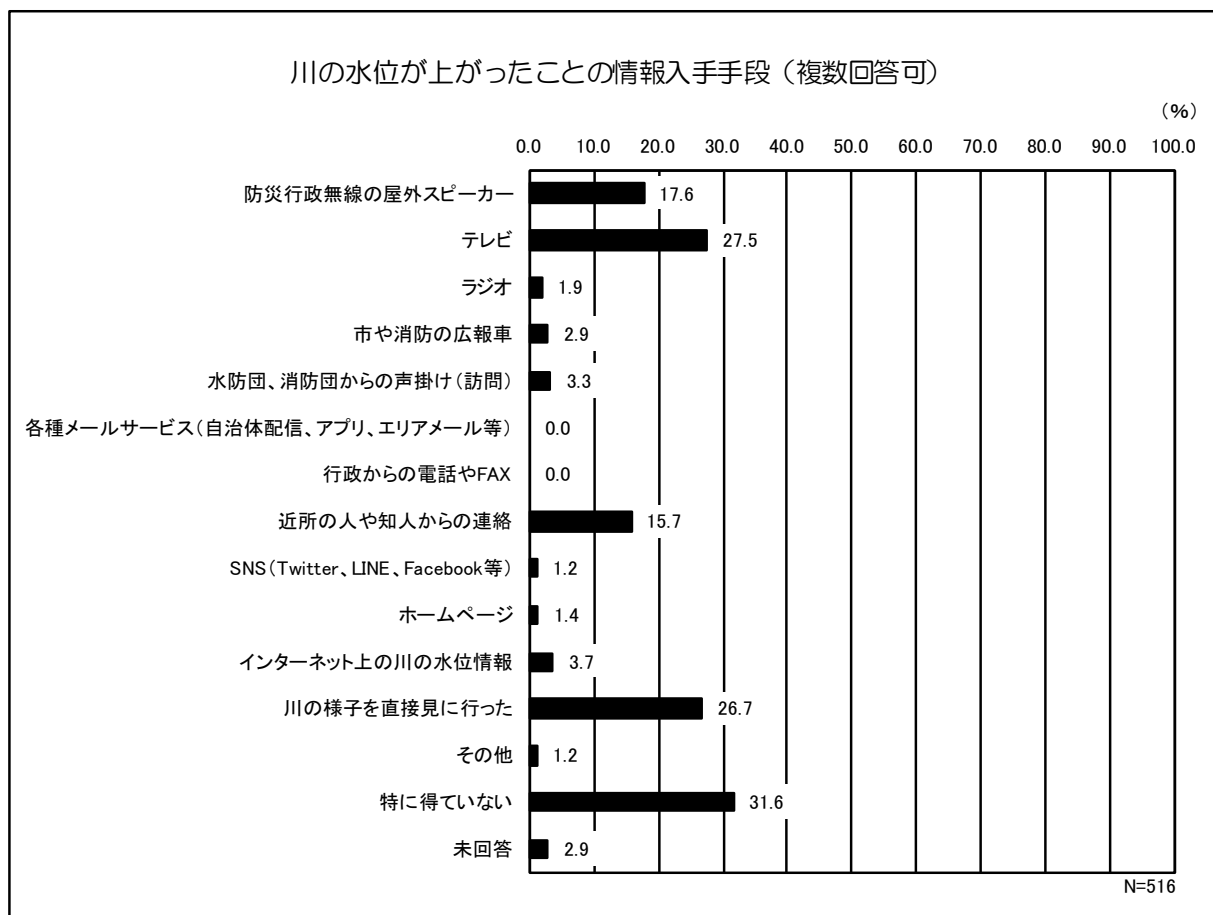


避難指示等が「わかりにくかった」と回答した住民が約 37%で最も多く、約 4 割を占めた。さらに、「避難勧告等を聞いていない」と回答した住民も約 31%いた。



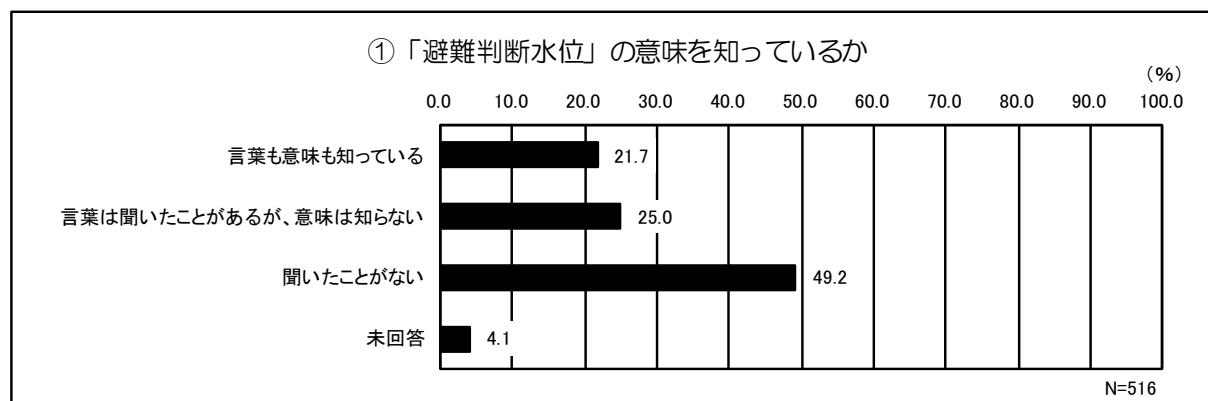
「避難指示等がわかりにくかった」理由については、「聞こえにくかった」と回答した住民が約58%と最も多く、次いで、「どのような行動をとれば良いのかわからなかった」が約14%、「どこに避難すれば良いかわからなかった」が約12%であった。

問 12) 災害発生時やその前に、川の水位が上がったこと等は何から情報を得ていましたか？（複数回答可）

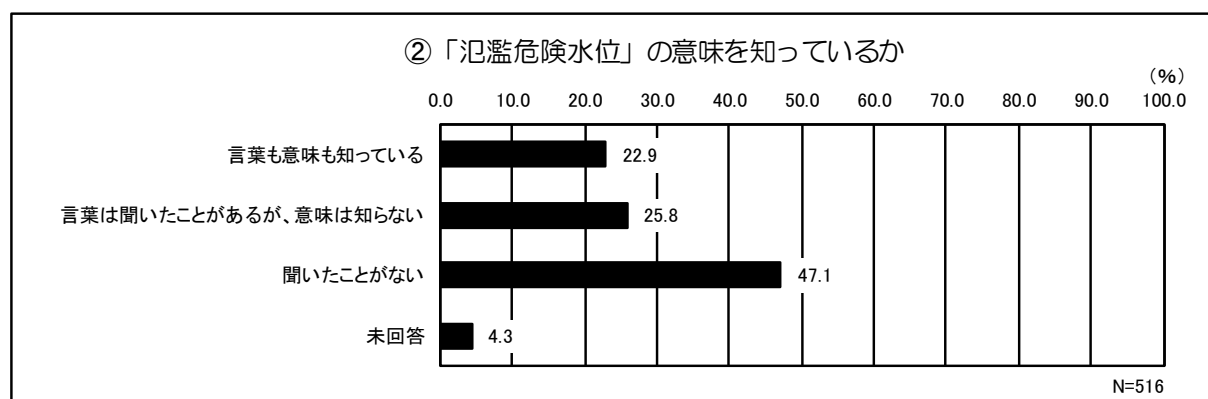


川の水位が上がったことの情報入手手段については、「テレビ」が約28%、「川の様子を見に行った」が約27%でほぼ同数であった。また、「特に情報を得ていなかった」人も約32%いた。

問 13) 川の水位が「避難判断水位」や「氾濫危険水位」を超えると避難を考える必要があった
 ことになっていますが、これらの言葉や意味を知っていますか？

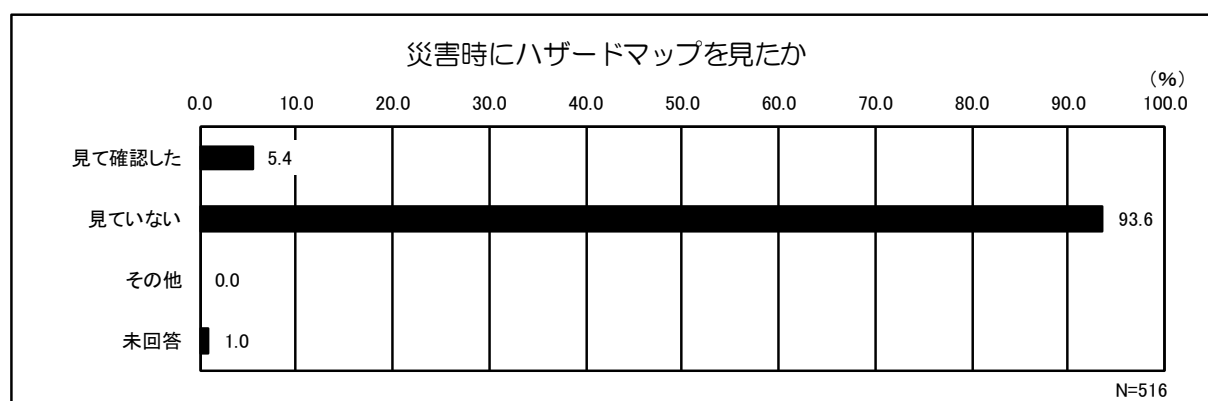


避難判断水位という言葉を「聞いたことがない」住民が約 50%を占めた。「意味は知らない」と回答した住民 (25%) と合わせると約 75%となり、大半の住民は避難判断水位という言葉を理解していないと言える。



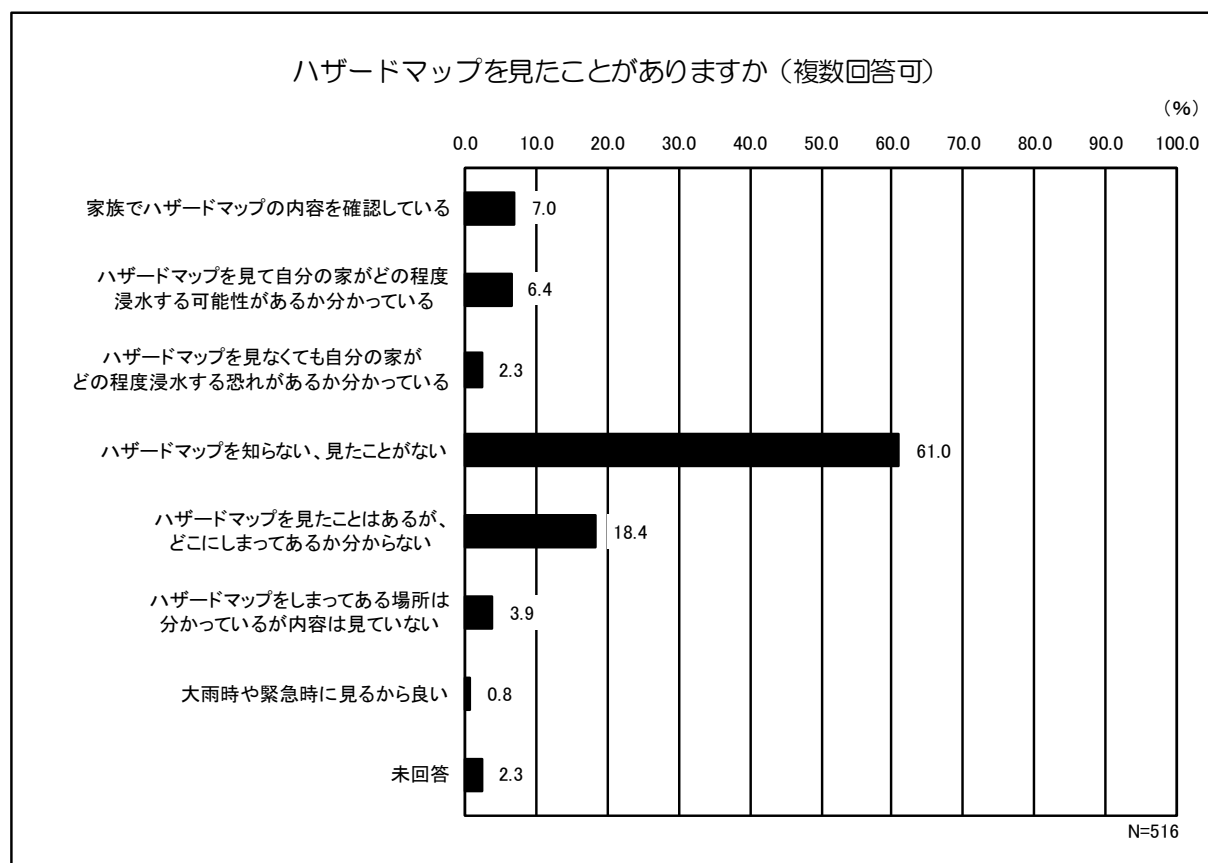
氾濫危険水位という言葉「聞いたことがない」住民が約 47%で、避難判断水位とほぼ同数であった。

問 14) 災害発生時にハザードマップは見ましたか？



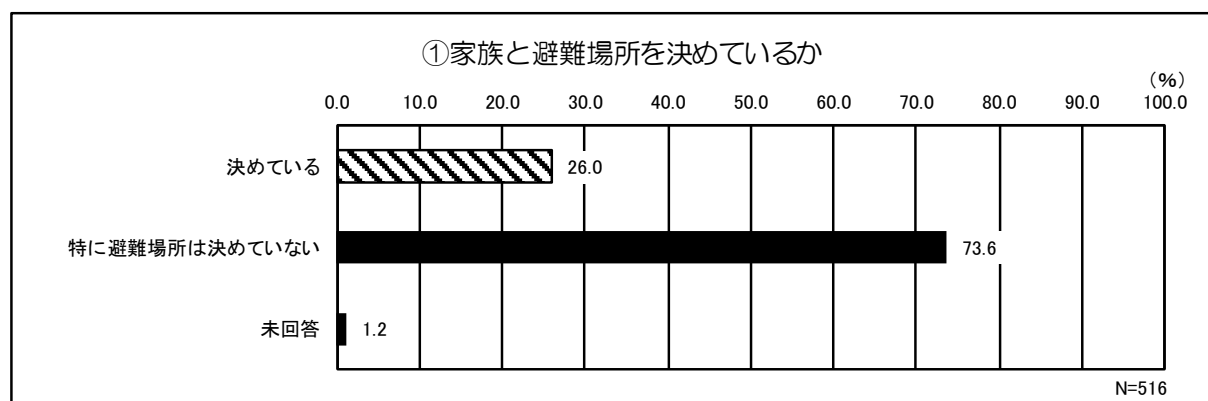
災害発生時には、ハザードマップを「見ていない」と回答した住民が約 94%であった。

問 15) ハザードマップを見たことがありますか？（複数回答可）

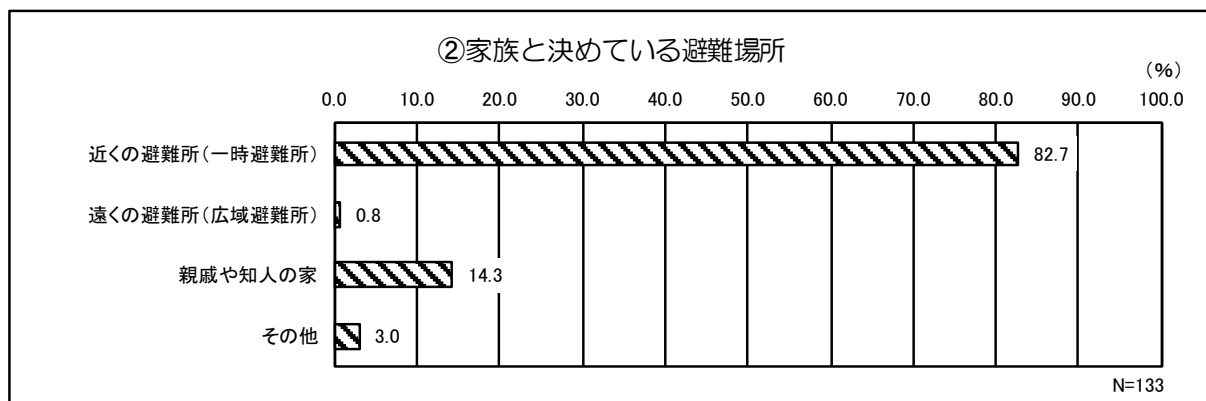


ハザードマップの認知度については、「ハザードマップを知らない、見たことがない」が 61% で最も多かった。また、「家族でハザードマップの内容を確認している」が 7%、「ハザードマップを見て自宅の家がどの程度浸水する可能性があるか分かっている」が約 6%で、大半の住民が自宅の浸水状況を把握していなかったと言える。

問 16) 日頃から家族と避難場所を決めていますか？

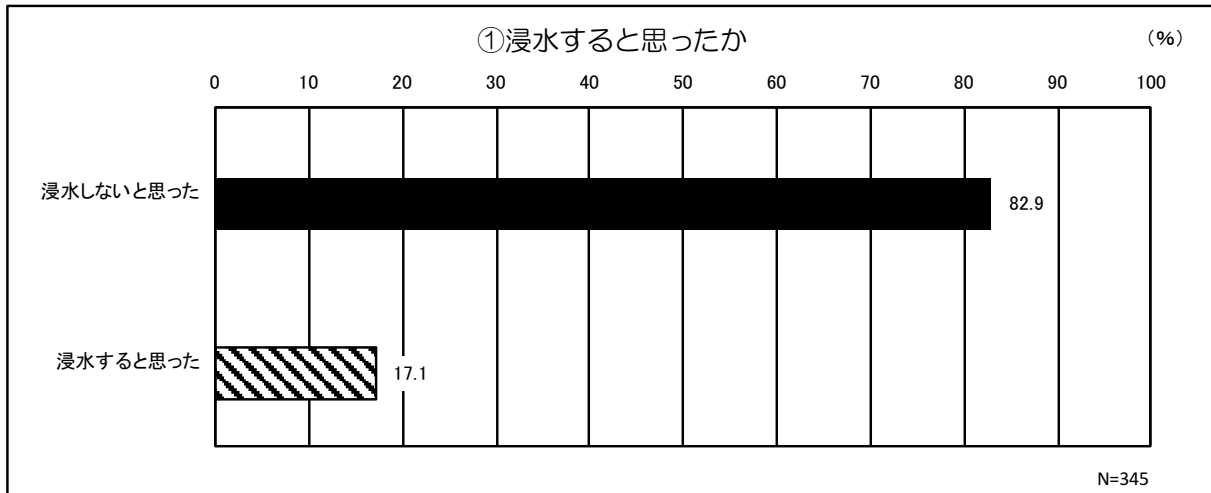


日頃から家族と避難場所を決めているかについては、「特に避難場所を決めていない」住民が約 74%であった。

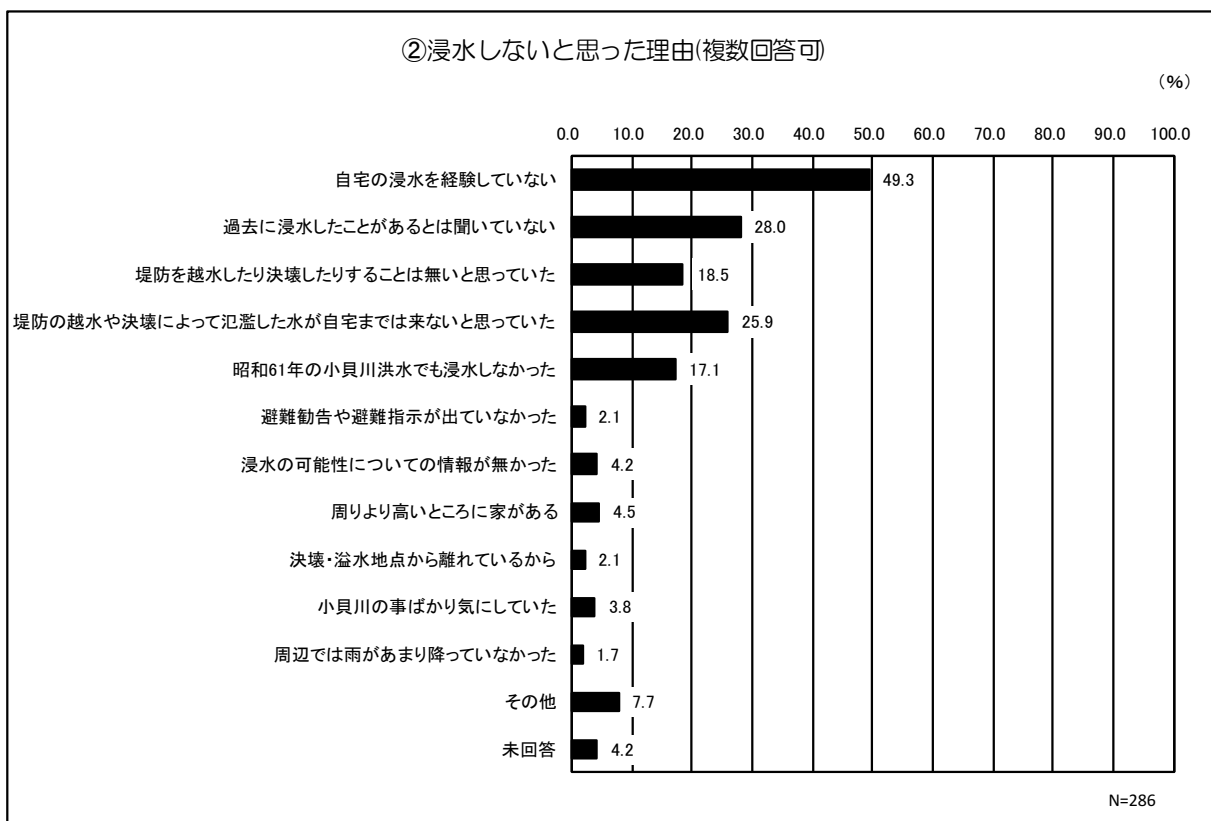


家族と決めている避難場所については、「近くの避難所（一時避難所）」が約 83%であった。

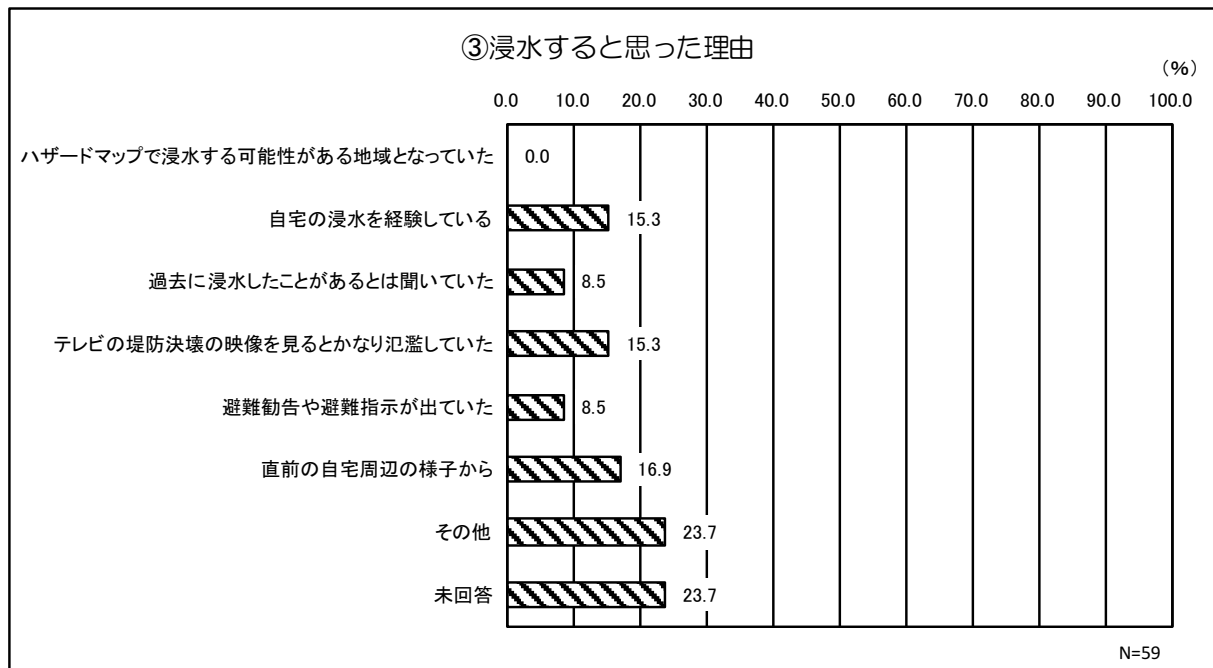
問 17) 自宅が浸水した方にお聞きします。浸水する前、今回の豪雨で自宅は浸水すると思っていましたか？浸水すると思った方はその理由と浸水の程度・浸水が継続すると思った期間を教えてください。



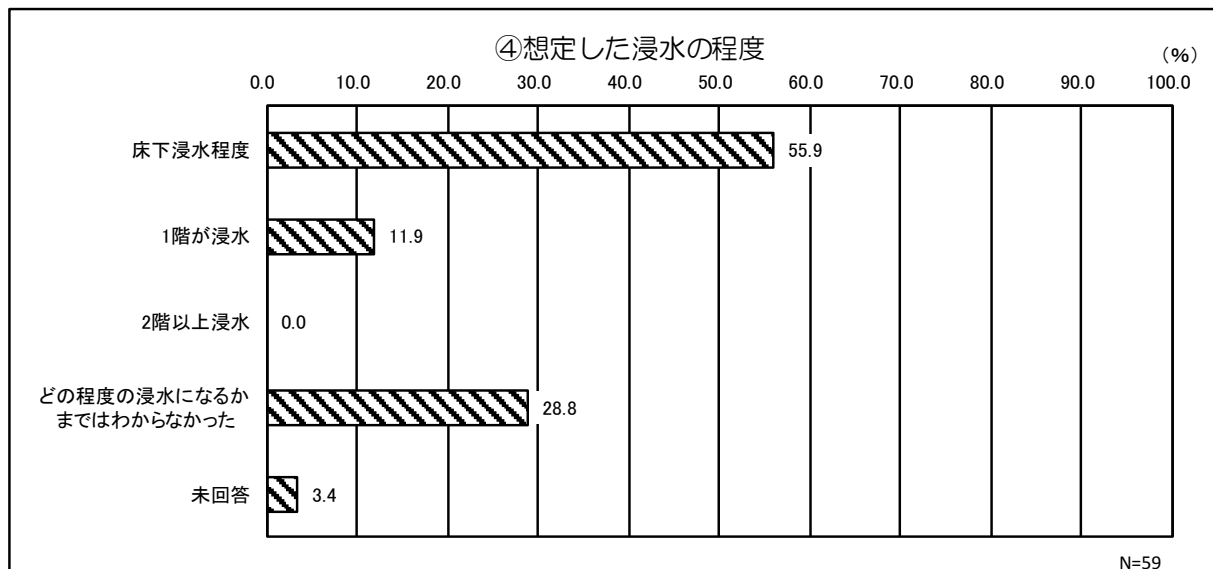
今回の豪雨で自宅が浸水する前に、「浸水しないと思っていた」住民が約 83%を占めていた。



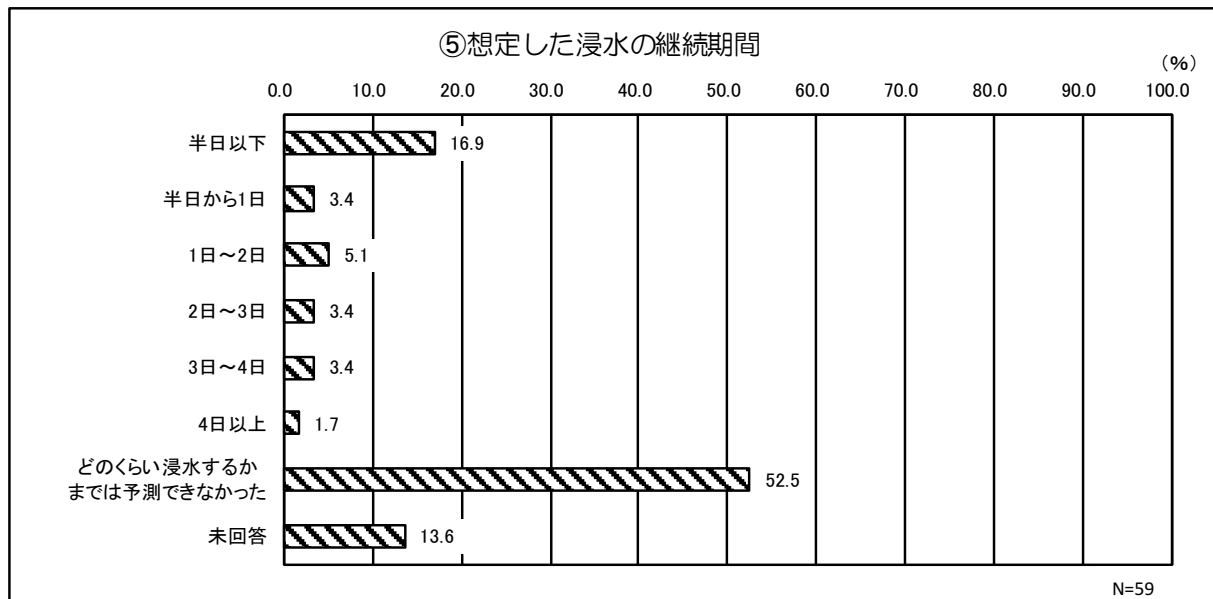
自宅が「浸水しないと思っていた」理由としては、「自宅の浸水を経験していなかった」が約 50%で半数を占めた。また、「過去に浸水したことがあるとは聞いていなかった」が約 28%、「氾濫した水が自宅までは来ないと思っていた」が約 26%でほぼ同数であった。



「浸水すると思っていた」理由としては、「直前の自宅周辺の様子から」が約 17%、「自宅の浸水を経験していた」が約 15%、「テレビの堤防決壊の映像を見るとかなり氾濫していた」が約 15%でほぼ同数であった。これらに対して、「ハザードマップで浸水する可能性がある地域となっていた」と回答した人は 0%であった。

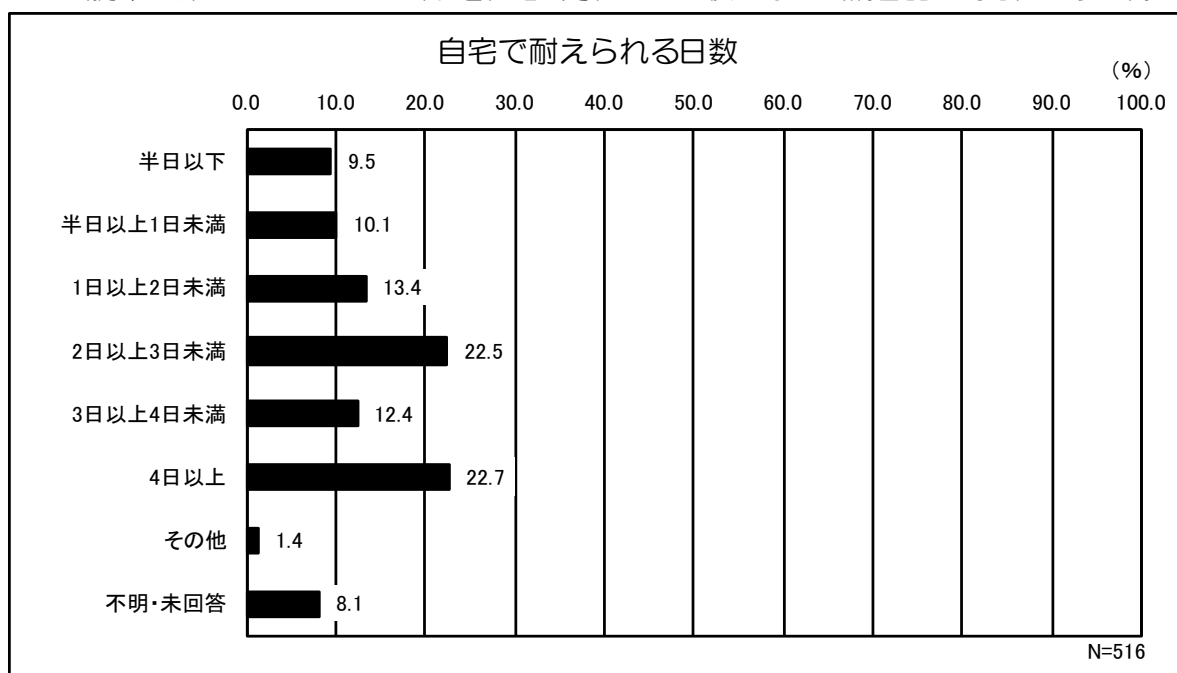


想定していた浸水の程度については、「床下浸水程度」が約 56%で最も多かった。



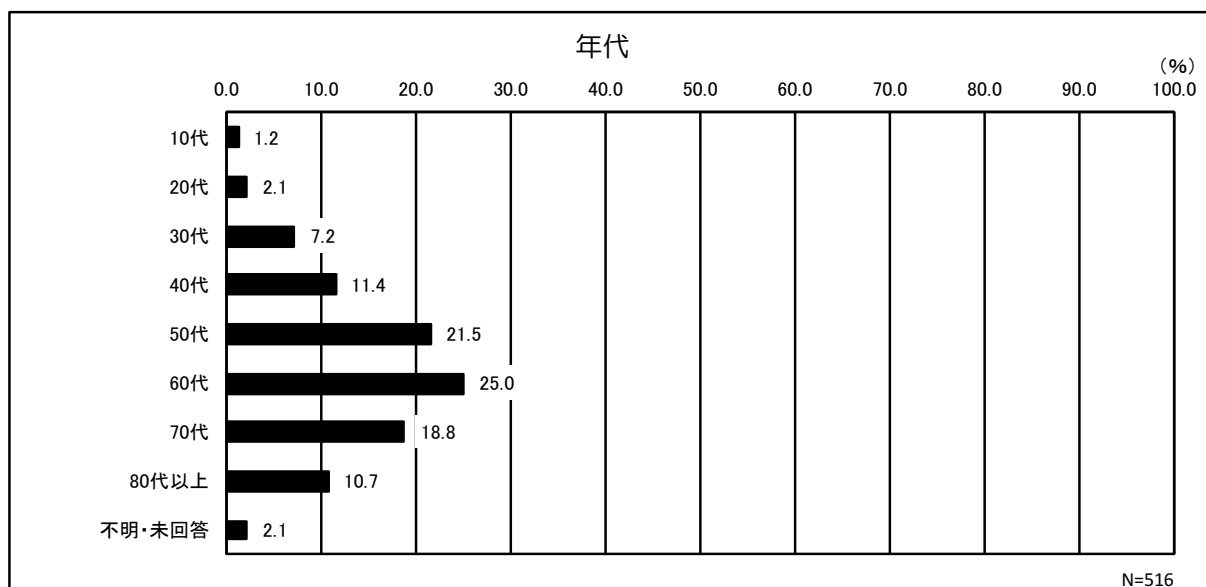
想定していた浸水継続期間については、「どのくらい浸水するかまでは予測できなかった」が約 53%であり、約半数を占めた。また具体的な回答としては、「半日以上」が約 17%で最も多かった。

問 18) 今回のような水害時で、備蓄品（食料・水、非常用トイレ等）も十分にあり、
 家族も一緒にいて、浸水が終わる（水が引く）見込みもわかるとしたら、
 最大何日間、自宅で耐えられますか？
 （携帯以外のライフライン（水道、電気等）は全て使えない（備蓄品で対応）とする）。



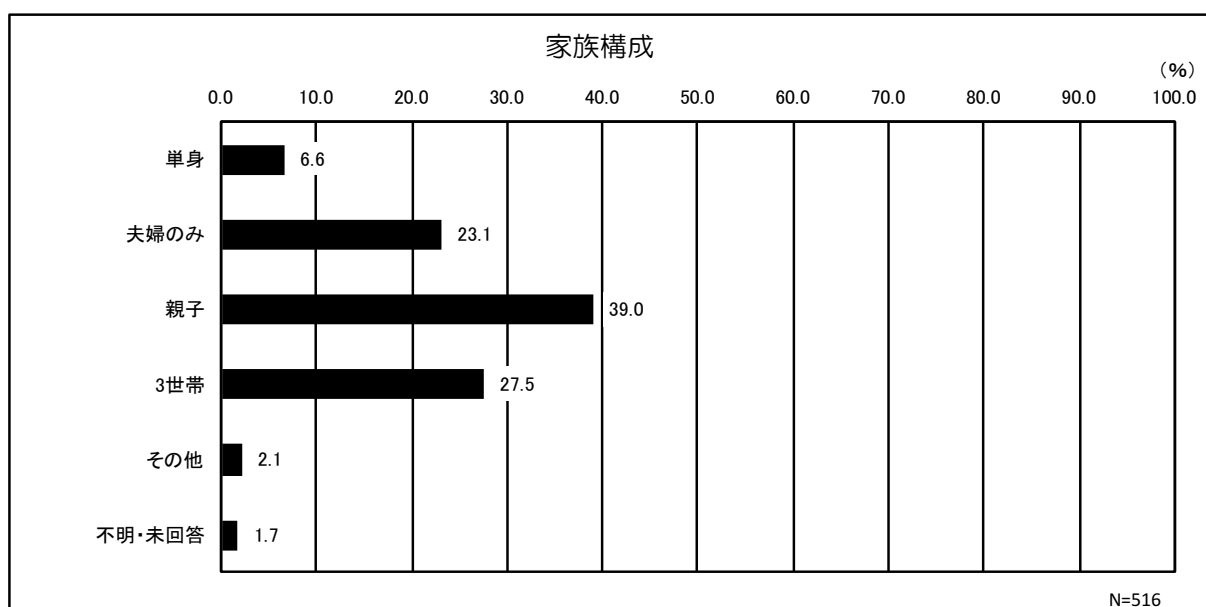
自宅で耐えられる日数については、「4日以上」が約 23%、「2日以上3日未満」が約 23%でほぼ同数であった。

属性1) 年代

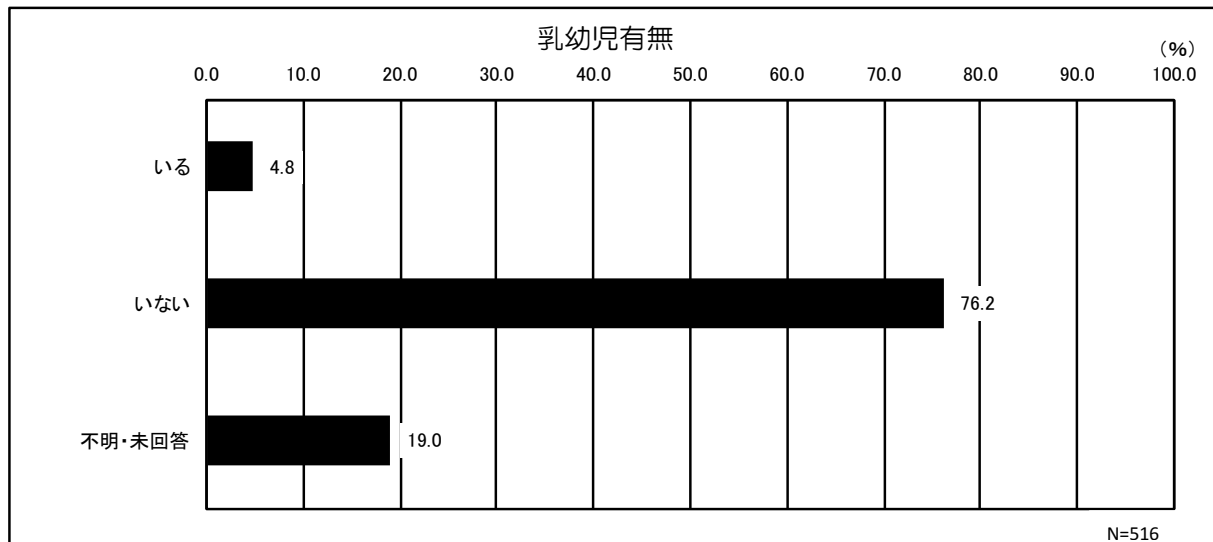


年代については、60代以上の回答者が全体の約半数を占めた。

属性2) 家族構成

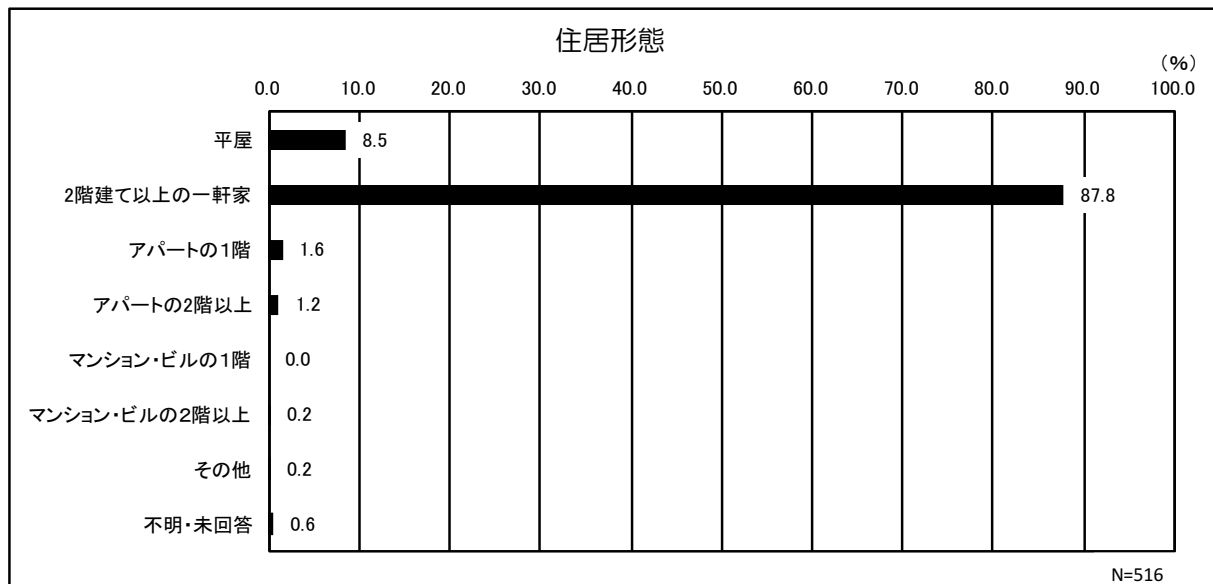


回答者の家族構成については、「親子」で住む2世帯の家族が39%で最も多く、次いで「3世帯」の家族が約28%であった。



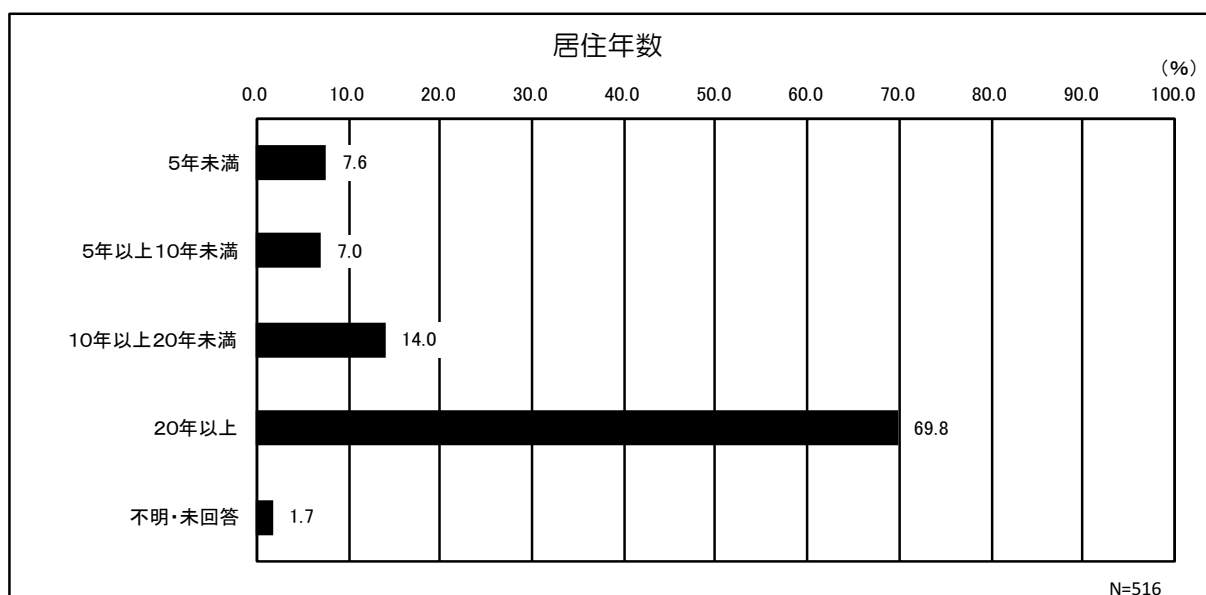
乳幼児が「いない」住民が約 76%であった。

属性3) 住居形態



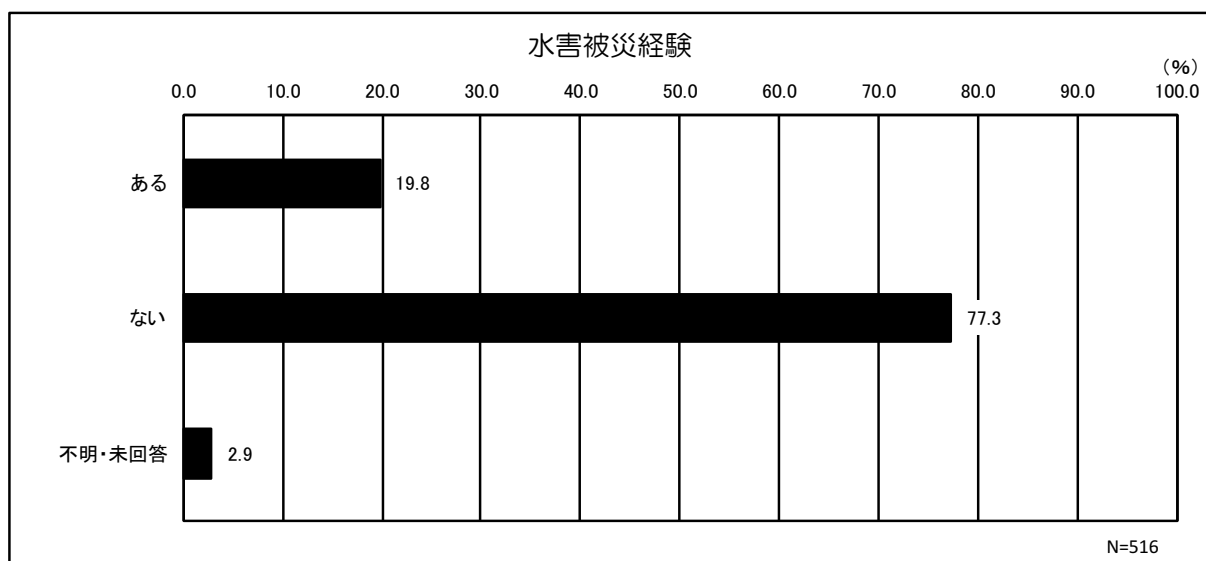
住居形態は、「2 階建て以上の一軒家」が約 9 割を占めた。

属性4) 居住年数



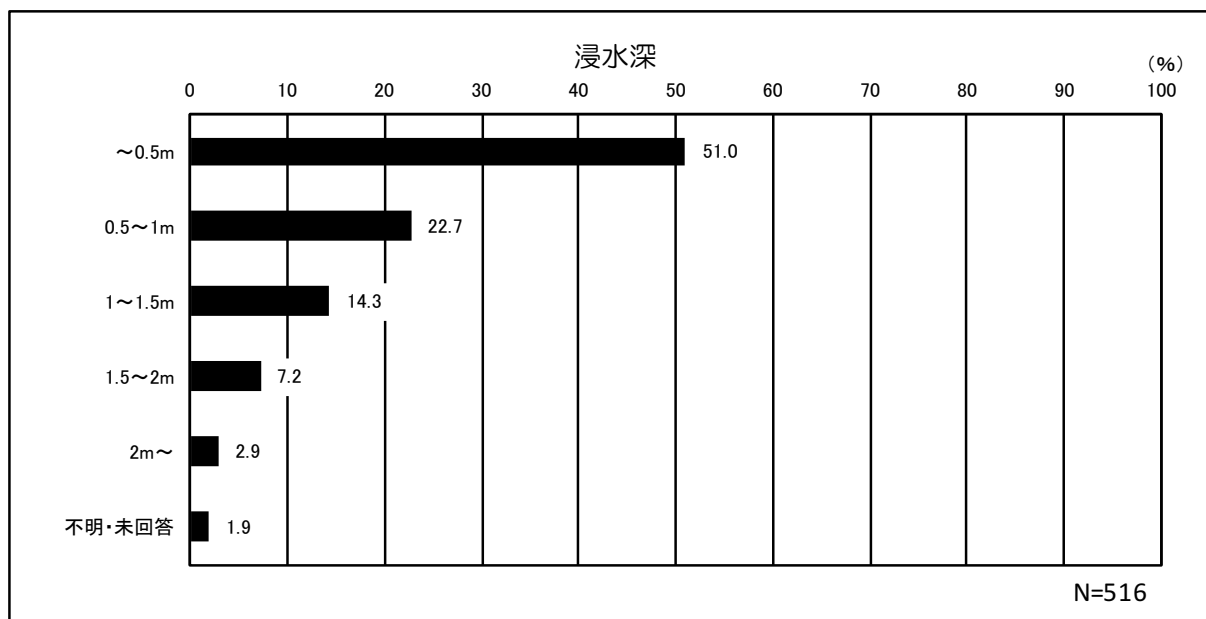
居住年数は「20 年以上」住んでいる人が約 70%であった。

属性5) 水害被災経験



水害被災経験が「ない」住民が約 77%であった。

属性6) 地面（道路面）からどれくらい浸水しましたか？（住民判断）



浸水深はおおむね「0.5m 以下」だったと回答した住民が約 51%を占めた。